

「命どう宝」(ヌチドゥタカラ)

鹿児島県立大島高等学校 2年 前田 聡子

南国の湿った風が肌にまとわりついてくる。生まれ育ったこの島は、こんなにも重いものであったらうか。昔は気にならなかった潮の匂いが、鼻をついた。義吉は、海岸を歩いていた。満点の星。その中で親玉のように輝くのは、十五夜の月。だが、義吉にはどんな鮮やかな景色も色あせて見えた。海岸から流れ着いた大木に腰かけ、一人ぼんやりと海を眺めた。漆黒の海。何も映さない黒々とした巨大な「ウミ」という生き物を前に、義吉は、ちっぽけな自分にため息をついた。

義吉は、ハイビスカスの咲き乱れる奄美大島の古仁屋で生まれた。この島の恵みとたくさんの愛情を受けて育った義吉は、この島を愛した。義吉には夢があった。「お金持ちになる」こと。無邪気にそう言い切って、十五でこの島を飛び出した。漁師だった父は、義吉が三歳の時に海にのまれて消えた。機織りをする母の稼ぎに頼るしかない生活は、決して楽ではなかった。母、妹、弟の気持ちを背負い義吉は働いた。しかし、義吉に次々と壁が立ちあがった。義吉の働く工場は、多額の借金を返しきれずに倒産。借金を抱えて、職もなく、義吉はいつの間にか、以前の輝きを失い、ゆったりと流れる一日一日に失望していた。そんな矢先に、母が倒れ、義吉は、再びこの地を踏んだ。夢に破れ「キヨさんはもう助からない。後三日もつか・・・」と言われて義吉は、こぶしを握りしめた。波の音が優しい。優しすぎて思わず耳をふさいで目を閉じた。その時、

「おい。」と誰かに呼ばれ、義吉は飛び上がった。がっしりとした肩に黒くて太い腕。長身の男は、ダイビングスーツを着て、ゴーグルをかけ、頭にタオルを巻いていた。いわたびを履き、手にはモリを持ち、籠を肩にかけていた。四十から五十歳ぐらいだろうか。長身の男は威圧的な存在感があった。

「そこで何をしている。」

義吉は答えられなかった。長身の男の目はゴーグルをかけていても、鋭く義吉を見据えていた。そして、こう話した。

「迷っているならば、ネリヤカナヤへ行け。」

「ネリヤカナヤ？」

「ノロのテロギ(手扇)を仰ぐことができたなら、お前の願いは叶うはずだ。」

何を言っているのか理解できなかったが、義吉の耳は「願いは叶う」という部分を聞き逃さなかった。

「見ろ。」

長身の男は、十五夜の月を指した。その瞬間月は輝きだし、足元が見える程になった。すると砂浜から「くすくす」という笑い声が聞こえてきた。義吉はぎょっとしてふり向いた。長身の男の姿は、そこにはなかった。笑い声は次第に大きくなり、砂浜のあちらこちらに穴があき始めた。そして、その穴からオオヤドカリ、スナガニ、オオイワガニなどが一斉に出てきたのだ。辺り一面、まるで白いハンカチの上にゴマをつけたかの様だった。「くすくす」と小さな子供のように笑いながらヤドカリ達は、義吉の目の前の海に向かって並び出した。やがてその列は、はるか沖の方まで続く道になった。

男は夢をみているような心持ちで、ぼんやりと見ていた。列の先頭にいたオオイワガニが、はさみを上げた瞬間、笑いはピタリと止んだ。

「お前，ネリヤカナヤへ行くのか。」

義吉は必死で考えた。かつて母が父に同じ様に尋ねていたことを，記憶の片隅から引っ張りだした。

「どうすれば，そこへ行ける？」

「走るんだ。海の果てまで。」

別のカニが口を挟んだ。甲高い声だ。

「急いでいかないと夜が明けるぞ。」

「だめだめ。ノ口はテロギなんかくれないよ。」

「私の願いも叶えてもらうわ。」

先程のカニがイライラしたようにハサミを鳴らし，周りは静かになった。「ネリヤカナヤ」とは，海のかなたにある幸せの国だと，義吉は幼い頃聞いたことがあった。また「ノ口」とは 奄美の神祭りをつかさどる神と言われ，テロギ という手扇を受領したと言われている。

「私たちの上を走るんだ。ミサゴが鳴く前に走らなければならない。さあ，行け。」

義吉は，ヤドカリ達の作った道を走り始めた。ゴツゴツしていたものの，意外と丈夫だった。どれほど走ったことだろう。突然，月が何かによって遮られた。鋭い目をした大きなミサゴだった。ミサゴは優雅に舞い，義吉の目の前に近づいた。そして，カッと目を開き奇声をあげた。ヤドカリ達は，一斉に姿を消し，義吉は冷たい水の中に放りだされた。義吉は泳げなかった。無愛想ではあったものの，強くて大きな父をも消してしまった海が，義吉は恐かったのだ。水中で必死にもがく義吉が海面に頭をだす度，ミサゴは翼で頭を沈めようとした。月の光がだんだん弱くなり，辺りは再び闇に包まれた。義吉は叫んだ。

「ネ口よ，テロギを，母の命を・・・」

口からも鼻からも大量に海水が入ってきた。働いてばかりの母を，ひもじい思いをしている妹を，弟達を楽にしてやりたい。そう思って島を出たのに。何もしてやれないはがゆさが義吉に力を与えた。義吉は，もう一度海面に上がった。その時，誰かに足を引きずりこまれ，義吉は気を失ってしまった。

気がつくと，そこは深い海の中だった。辺りは闇に包まれ，「何か」が足をさらに下へ下へと引っ張っていく。義吉は，闇の中に輝く光の玉を見つけた。闇を照らすのに役立つだろうと思い，手にとってみる。「何か」は足を引っ張るのを止めた。そこは海の底だった。底はひんやりと冷たく感じた。光の玉が輝きだし，数メートル先に小さなほこらが見えた。義吉は近づいた。恐いとは思わなかった。義吉には，ここに誰がいるのかわかっていた。長身の男が手をかざすと，二枚貝はゆっくりと開き，中にはテロギが入っていた。鳳凰が太陽と向き合い，裏には月と花が描かれている。輝くそのテロギは，闇を明るく照らした。

気を失った時，義吉は思い出していた。義吉にネリヤカナヤを教えたのは父であった。父は，ネリヤカナヤもノ口もこよなく思慕していた。あの日，父は引きとめる母の言葉に耳をかさず，「ネリヤカナヤへ行く」と言い残し，消えた。

義吉はテロギを手にとった。指が震えていた。ほこらに向いたまま義吉はつぶやいた。

「ありがとう，お父さん。」

突然，「何か」が勢いよく通り過ぎ，輝く物を落とした。底には骨が落ちていた。父はこ

こへ辿り着いたのだ。

義吉は、テロギを力一杯ふりかざした。そして、  
「命どう宝。母さんや妹達を。」

義吉はテロギを勢いよく仰いだ。  
「頼んだぞ。」

稲妻のような光が飛び交い、渦を巻いて激しくぶつかってきた。「ゴォォ」という音と共に、義吉は再び気を失った。

義吉は海岸に打ち上げられていた。目を開けると、朝日が眩しかった。ゆっくりと立ち上がると、何かが足元に落ちた。海の底で見つけた、小さな玉だった。

朝日で輝く海を見ながら、義吉は深く息を吸った。こんなにも輝く朝日を、何年ぶりに見たことだろう。潮の匂いが香ばしい。いつか、母や妹達をここへ連れてこよう。きっと泳げないだろうけれど。

さわやかな南国の風が頬に当たり心地良い。鳥たちが、今日も誇らしげに歌っている。義吉の足は、母の待つ病院へと踏み出した。母の回復への確信と共に。

「命どう宝(ヌチドゥタカラ)」・・・命こそ宝